

米国編

映画文学人生論

3011) 白鯨	H. メルヴィル
3007) 風と共に去りぬ	M. ミッチェル
3008) 武器よさらば	E. ヘミングウェイ
3009) 怒りの葡萄	J. スタインベック
3010) 裸者と死者	N. メイラー

すべての人間は平等につくられている

日本とアメリカとの国交がはじまったのは日米和親条約が締結された一八五四年から。その後の歴史は戦争の歴史でもある。あらためて五篇の文学作品を読み、両国の歴史を振り返った。

白鯨	H・メルヴィル
風と共に去りぬ	M・ミッチェル
武器よさらば	E・ヘミングウェイ
怒りの葡萄	J・スタインベック
裸者と死者	N・メイラー

『白鯨』はペリーの黒船来航を予告していた。ペリー提督はメキシコとの戦争で功績をあげた余勢をかって日本へやってきたのだ。

『風と共に去りぬ』は文久元年（一八六一年）に勃発した米国の南北戦争の時代、『武器よさらば』は第一次世界大戦の時代、『怒りの葡萄』は戦争と戦争との谷間の大恐慌時代、『裸者と死者』は第二次世界大戦の時代のアメリカ人の生き方を描いた小説である。

日本人とのものの考えの違いがわかって面白いが、疑問もいろいろ湧いてくる。たとえば、平等という思想について。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずといへり」は福沢諭吉の『学問ノススメ』で平等を説明する言葉として知られているが、もともと



米国篇

映画文学人生論

はアメリカ合衆国の独立宣言に由来している。

江戸時代の日本は、士農工商の身分差別があったが、『学問ノススメ』の平等思想はそのような身分差別を否定する。当時の日本人はいわばアメリカ人から平等思想を教えられたかたちである。

『学問ノススメ』はベストセラーとなった。

しかし、五篇の小説を読んでもみると、アメリカ人がけっして平等ではなかったことがわかる。船長と水夫、農園主と奴隷、大統領と失業者、インディアンと黒人と白人、司令官と軍曹と兵士。社会は人の上に人をつくっている。組織や社会も無秩序にしないようにするためだ。

そこで、平等についての議論は「機会の平等」と「結果の平等」に分けて、是々非々の論争が繰り返されている。

ところが、日本ではペリーの黒船来航以前から仏教用語として平等という言葉が使われていた。その意味は、他人の苦楽を自己の苦楽と差別しない智慧。我という執着、つまり我執をなくしたところで、「平等」という智慧が獲得できる。

この智慧を江戸時代やそれ以前の日本人がどれほど身につけていたかどうかはわからないが、黒船来航以来、アメリカ人のいう意味での平等ばかり重視して、仏教の教える平等の智慧を忘れてしまったのはもったいない。

照見五蘊皆空 度一切苦厄